

幼児の身体表現あそびにみられる物語展開の過程 (3)

— 模倣の意味に着目して —

○鈴木裕子

(名古屋柳城短期大学)

1. 研究の経過

本学会第 55、56 回大会では、幼児が身体表現あそびのなかで物語をつくる過程を報告した。物語の展開には、「物語の発端」部分で、からだや動きを通して空想の世界に入り込む要素が必要であり、「物語の展開をすすめる」部分では、個々のからだや動きの意識を越え、その場の空間を場面としてイメージする要素、「物語の展開をひろげる」部分では、からだの形や動きが、表現対象に似ているという次元を越えて、その場の事象や現象に意味を付与する要素が必要であるという考えを述べた。

次いでこれらの物語展開過程 3 部分の図式化を試みた。この図式は、質的なデータの具体的な固有な部分を認めながら、一定の一般性を表示できるものとして、子ども達が物語る過程の解釈に利用できると考察された。

その後、図式に適合させて事例を解釈し分析する試みを通して、物語る過程のなかでは、子どもたちはまず、からだや動きや空間を何かに「名づけ」、その後一連の文脈のなかでイメージと結びつけ、「意味づけ」で動くというプロセスがあることがわかった。

さらに、イメージの変容のプロセスでは、子ども一人ひとりの対象への独創的な問いかけがきっかけとなり、からだを通して他者と交流する感覚がイメージの膨らみを支え、そこでは、ことばの背後にある動きのリズムが媒体となっていることも見いだされた。

2. 研究の目的

本年は、特に身体表現場面における幼児の模倣の行為に着目してみたい。

前回のイメージの変容過程の考察において、子どもにとって模倣という行為が、何らかの情報をコピーしながら、それを加工したり、生まれ変わらせたりして独自の表現を生成させる力となることを様々な場面から読み取ることができた。乳幼児の発達段階において、模倣の意義は大きい。模倣は創造の源であるといった理念は概ね了解されているが、一方で“人の真似ばかりしている子ども”の状況をプラスには評価しにくい。筆者は、実際の保育場面で、一人の保育者が「自分で思いつかなかつたらお友達の実似をしてもいいよ」と言葉がけたことを巡って、その後、園内で模倣の解釈や援助方法への悩みを討議する機会を経験した。人の発達という見方からの

模倣の段階は、ある程度明らかにされているが、一連の行為のなかでの模倣の意味をとらえるためには、模倣という行為をさらに詳細にし、模倣がもつ力を明らかにする必要があると感じられた。そこで本年は、身体表現で物語る実践の場面の観察から、模倣をするパターンを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

1) 期間と対象：1997 年 10 月～2003 年 11 月の期間に愛知県内の幼稚園、保育園で、筆者及び担任保育者が実施した身体表現あそびの保育の VTR や記録、保育者からの聞き取りを中心に事例をもとに考察する。

2) 事例抽出の枠と分析の観点

身体表現あそびの物語展開過程で出現した行為を「模倣」と捉える枠を、一人の子どもが、他の子どもの動きを真似していると思われる現象と定義し事例を抽出した。広義には、その場になく対象を表すことも創造的な模倣とする解釈もあるが、今回は模倣対象として他児(模倣対象児と称する)の動きが確認できることを条件とした。

模倣を行った子ども(模倣する子と称する)の分析は、真似した動き(フォーム、リズム、空間)の特徴とその後の変容に観点を置いた。以下の事例では、これらの観点に関わる部分に下線を記した。

4. 事例と考察

<事例 1> 2003. 11. 7 「からだ」R 幼稚園年長クラス

活動のはじめの部分の、「背中はどこかな?」など、からだのいろいろな部分をさわったり動かしたりする遊びのなかで、A 子は保育者の言葉がけを聞くと、右隣に立つ B 美のするのを見て、ワテンボずらして、同じような動きをすることを繰り返した。子どもたちが遊技室に広がりはじめた後には、その行為はなくなった。

* 真似することによって、動き出しのきっかけを得ている。模倣対象は特に印象的な動きである必要はなく、模倣している子も対象の動きそのものを表現の情報として取り込んでいるわけではない。

<事例 2-a, b> 2001. 11. 29 「そしたらそしたら」

R 幼稚園年中クラス

a 「はい、とっぼーん」という保育者の声と、魔法の鈴の音を聞いた子どもたちは、各々ビー玉になり丸まって床をころころと転がり始めた。C 子は立ったままじっとしていたが、目の前の D 子と E 子が身を縮めてハイハイ

した後、横転するのを見て、恐る恐る前方へ倒れながら足をまっすぐに伸ばしたまま、ゆっくりと横転し始めた。

b その後、保育者の「F 菜ちゃんがあんなところに転がっているよ」の声を聞いて顔を上げる。かなり離れたところにいる F 菜の、膝を抱えて小さくなり左右に転がる様子を見つめる。C 子は、F 菜のように膝を曲げ、しっかりと身を縮めるようにして転がり出した。

* 前半 **a** では、動き出すきっかけを目前の子に求めている。模倣対象児 2 人の動きが明快であって真似しやすいことも大きな要因のようだ。

* 後半 **b** では、保育者の言葉がけに促されて遊技室の端にまで視線を写して模倣対象児の動きを観察し、独自の表現にまで至っていないが、動きのアイデアを取り込んでいる。

<事例 3> 「そしたらそしたら」(事例 2 に同じ)

周囲の子どもたちが次々と思い思いのビー玉になり、小さく丸まったり転がったりするなかで、A 男は動く様子もなく、すぐ近くに立つ保育者に寄り添っていた。保育者が A 男の近くから離れると、自分の横で正座し丸まっている B 男を見つけ、後ろから肩に手を回し抱きついた。後ろを振り返ると、男児が次々に集まり上に重なりあっていた。A 男は B 男から手を離し、そこに走り寄って一緒に重なった。次に保育者の「G 子ちゃん、あんなところまでいっちゃったね。」というのを聞くと、走って G 子の近くに行き、G 子が坂を下るビー玉のように転がっているのを見て、ごろごろと横向きに転がり出した。

* 模倣対象の動きの質を取り込んでいるというよりも、模倣対象児の近くで、その子の動きをなぞらえて一緒に動くことを楽しんでいる。

<事例 4> 1997. 10. 17 「おいも」F 幼稚園年長組

I 子は、おいもを食べるふりをする H 美に近づいていき、同じように両手で口を押さえるようにして両手を動かす。その後、2 人で顔を見合わせるようにして同じリズムで両手を動かす。次いで H 美は I 子の身体をおいもに見立てて、I 子の身体に触りながら食べる真似をする、I 子も同じように動く。2 人はそれを繰り返す。その後、別の動きの場面でも 2 人のやりとりは行われた。

* 模倣対象児と模倣した子ども同士が動きをなぞられて相互にやりとりを楽しんでいる。動きのやりとりをもとにした遊びに発展したようだった。

<事例 5> 「そしたらそしたら」(事例 2 に同じ)

絵本をひろげて「これは、なあに? すってんきりんだね」という保育者の声と鈴の音とともに、子どもたちは、きりんになって各々ひっくりかえる。J 子は、少し周囲の様子を伺いながら、背中を床につけて足をそとと垂直にあげて転ぶ。すぐ横で C 男が足を曲げて、ごろんと横向きに転がりながら移動すると、それを見た D 男が後を追うように同じように転がる。J 子は伸ばした足を

曲げて試すように 2 人と同じ動きをする。その次に、保育者が「もう一度、すってんきりん!」と言うと、J 子は、はじめに自分が行った動きを膝をまっすぐに伸ばして、周囲を向うことなく、すぐさま行う。

* 他児の動きを観察して模倣して動くことによって、自らの身体感覚を明確にし、気持ちを呼び起こし自分のイメージをはっきりさせていくプロセスとして読み取れる。

<事例 6> 1998. 12. 8 「紙」F 幼稚園年長組

顔だけを上げてうつぶせに寝ながら、周囲をながめていた K 子は、保育者の「風が吹いてきたら紙ってどうなる?」という言葉がけを聞くと起きあがり、両手を広げて立った。保育者が動きを誘うようにピアノを弾くと、円を描くように両手を広げて走り出した。その前で L 子が両腕を鳥のようにゆっくり羽ばたかせるように走っているのを見て、L 子と少し距離を保ちながらも並行してかなり正確に同じように両腕を動かす。しかしその後、広げていた両腕を左右交互に上下させて斜めにしながら走った。ピアノの音が終わると、ほとんどの子どもはうつぶせになって床に寝たが、K 子は両手を広げたまま片膝を立ててしゃがみ、平らな紙を表していた。

* 模倣によって自分の表現にはなかった動き方に気づき、新たなアイデアやイメージが生まれている。積極的な情報の取り込みと捉えられるが、そのためには自分自身の動きを行っていることが前提となる。

5. 模倣のパターン

幼児が身体表現の場面で模倣をするパターンが以下のように分類された。

- 1) 動きははじめのきっかけやタイミングを求める場合 (事例 1 事例 2-a)
- 2) 動きをなぞらえたり、やりとりして楽しむ場合 (事例 3 事例 4)
- 3) 自分の動きやイメージを意識する場合 (事例 5)
- 4) 自分にないイメージや動きのアイデアを取り込む場合 (事例 2-b 事例 6)

この 4 つのパターンは、1) から 4) へと高度な段階とみなすよりも、独自の表現への誘いのための援助方法に異なりは必要であるが、いずれの段階もまずは創造への第一歩となることを認める視点が必要であろう。

次の課題は以下のものである。模倣対象児と模倣した子の関係は、必ずしも日常の友人関係に依存していないことを担任保育者が指摘した事例が多くあった。たへん興味深い。このような子どもの関係性の観点が今回の分析において不足している。また、幼児が他者の動きを模倣する能力、特に動きを正確になぞる力というもの個人差が、これらのパターンの出現と関係があるのかという問題も浮き上がった。